

2017年1月26日

49号

ハイマート Heimat

ぐんま日独協会 会報

発行者 鈴木 克彬

発行所 ぐんま日独協会

〒371-0105

群馬県前橋市富士見町石井 2445-219

電話 : 027-288-4297

E-mail : info@jdg-gunma.jp

ホームページ : <http://www.jdg-gunma.jp/>

ホームページ右下『ハイマート』から本誌をカラーでご覧いただけます。



*** 【 2011年の日独交流150周年記念で植樹した菩提樹の前で 2016年11月撮影 】 ***

1. ハイマート 49号に寄せて (会長のことば)	2
2. ドイツ大使館「夏祭り」に参加して	3~4
3. ドイツ炭鉱派遣の思い出 (連載-1)	5~7
4. ブルーノ・タウトの日本における幻の建築	8~9
5. 独俳 (ドイツ語で俳句) (連載-4)	10~12
6. デザイナー修行奮闘記 (連載-9)	13~15
7. 事務局からのお知らせ	16

1. 会長挨拶

英国のEU離脱を考える

会長 鈴木克彬

今、メルケル首相をはじめドイツの人達は、英国メイ首相のEU離脱声明や米国トランプ大統領の反EU発言を受け、寂しい気持ちで一杯ではないかと推察・心配しています。

過去ヨーロッパの歴史は、第一次・第二次世界大戦を含め悲惨な戦争の歴史だったと思います。そのため、ヨーロッパ各国は、二度と戦争を起こさない様な体制(注1 汎ヨーロッパ思想)を目指し、多くの苦悩・苦難を乗り越え、EU体制が確立されたのだと思います。

その結果、EU各国は新たに制定されたシェンゲン条約等を中心に、国境をなくし、入出国の自由化や関税の撤廃、統一通貨ユーロの制度化等、ヨーロッパの平和と繁栄へと大きく推進貢献したのだと思います。

ところがこの制度は、年月の経過とともに、あちらこちらで綻びが出始めました。ユーロによる統一通貨制度は、参加国の経済力の相違から、国家財政の破綻に結びつくユーロ危機が発生。また中近東等で発生した政治的混乱は、陸続きのヨーロッパへの難民の流入・テロ発生の危惧等が持ち込まれました。

しかしEUの中核国であるドイツは、財政問題は当事国への改革と融資を図るとともに、難民問題は過去の苦い戦火の経験から生まれた人類愛を中心に、ドイツ国内の各州が一丸となって難民の受け入れ救済を図って来ました。それらの努力・行為が“非難されてはたまらない”というのがドイツ人の現在の素直な気持ではないでしょうか・・・

今後国際政治はどのように変化するか判りませんが、今般の英米首脳発言ニュースは“外交問題の不継続性”と“大衆迎合(ポピュリズム)思想の増大化”が大きな課題として残るものでした。皆さんはどのように思われたでしょうか。

注1 汎ヨーロッパ思想とは、ハインリッヒ・クーデンホーフ・カレルギー氏等がヨーロッパ各国の共同体・平和を目指し提唱したものである。

尚、カレルギー氏の母親は、明治時代、日本に駐在していたオーストリア・ハンガリー帝国の外交官と結婚・渡欧し、伯爵夫人となった青山光子さんである。

2. ドイツ大使館「夏祭り」に参加して（石関 尚子 記）

9月22日（木曜、秋分の日）大使主催の「夏祭り」が開催されました。今回そちらに参加してまいりましたのでご報告させていただきます。

ハンス・カール・フォン・ヴェアテルン新駐日大使の特別なお厚意により開催された今回の夏祭りの参加者は約80名、その内の33人の方が45歳以下であるとの紹介がされました。今回のように若い年齢層が多く集まる会は珍しいようです。大使もドイツと日本の親交が世代ごとに受け継がれていく様子に独日協会全体の取り組みが実を結んできていると実感されているご様子でした。



【ヴェアテルン駐日大使と
ぐんま日独協会員のツーショット】

群馬からは私を含め3人出席しました。開催場所となった大使館公邸は開始時間の30分前に受けつけが開始され、午後2時ちょうどに大使の挨拶と日独ユースネットワークの代表の挨拶ではじまりました。福岡、神戸、愛知、茨城、埼玉、横浜、東京 etc 様々な地域から会員が集まり、終了時刻の午後4時まで出された食事を片手に思い思いに 交流を深めていました。

初めて夏祭りに参加したという意見が多くきかれ、大使館のなるべく多くの人に交流の機会を提供したいという思いに触れることができました。



話はそれますが、ドイツで誕生日を祝う時に歌われる“Heute Kann Es Regnen”をご存知でしょうか。

Heute kann es regnen, stürmen oder schnein, denn du strahlst ja selber wie der Sonnenschein.

大使の「雨が降っていますが交流を楽しむには問題ありませんね」いう言葉に、この歌詞と同様人と接する時間を大事にする心を少なからず感じ取りました。

「大切なのは我々がこの時間を共に過ごせること」会場の参加者にも伝わったのでしょ

う。会場全体が会話を楽しんでいる声や笑い声で包まれている印象を受けました。



私も実に多くの方とお話をする事ができました。中でも印象にあるのは、ぐんま日独協会のホームページも神戸日独協会のホームページの編集に参考とされていた話です。古き良き神戸と人々の交流の調和を目指して、ホームページの変更がなされたそうです。

ホームページより同協会の存在を知ったお話を今回よく耳にしました。以前ドイツで働いていた方、留学していた方、これから留学をする方、みなドイツ語が話されている場を求め入会されたそうです。日本人同士ドイツ語で会話をすることも少ないように思われますが、いまある環境でいかにドイツ語に触れるか考えさせられる一日ともなりました。

今回の夏祭り同様に、今後も、様々な経験をされた方がそれぞれのドイツを胸に一同集まれる協会であり続けられることを願っています。

最後になりますが、夏祭り主催者のドイツ大使館、お声かけくださいました鈴木会長、また私にドイツとの繋がりをくれた両親に感謝の意を表して報告を以上とさせていただきます。

補足となりますが、今回ドイツ語の学習にと Deutsche welle のサイト内にある Learn German を活用してみました。“字幕付き3分前後”のドラマが何十本もありますので、興味のある方はぜひ、見てみてください。

以上

3. ドイツ炭鉱派遣の思い出（對馬 良一 記）

昭和33年（1958年）1月9日午前10時45分、大夕張の町は冷え込んだ寒い朝だった。栄町の山本区長が「熊さん・・・（父の名が熊三）本店より連絡が来たヨ・・・」と我が家に飛び込んできた。それは私のドイツ派遣が決定した瞬間だった。



【三菱大夕張炭鉱絵はがき】

前年（1957年）6月頃だったと思う、採炭係長の織田さんから、「對馬君ドイツに行く気はないか？」と突然いわれた。織田係長は早稲田大学出身でよく自分に炭鉱技術のことや外国のことについて話をしてくれた。第一次のドイツ派遣があったときも当時の現場係員だった小菅機械担当係長からも言われたことがあった。当時は母の失明などで全然その気にもならなかった。父は炭鉱労働組合の保安委員として選挙で選ばれ組合員の職場の安全の確保に会社に職場の改善など具申する立場にあった。また父は私の二年先輩のK氏をドイツ派遣の候補に挙げ推薦していた。7月頃だったと思うが、「對馬君、私が君の推薦でドイツ派遣の、試験を受けるように・・・。」と言われた。炭鉱に入った時の職場が、当時初めて導入された空気充填という岩石を砕いて空気の圧力で石炭の採掘跡を充填する岩石を破砕する仕事で、ブリーデンというドイツ製の機械だった。そのときドイツの機械の優秀性を実感したものでした。

家族、父に内緒で試験を受けた。前記のK氏をはじめ、柔道のA氏、夕張工業高校出のO氏など30名ほどの25歳前後の若者が受験場にいた。これは完全に無理で合格する自信もなかったが、従来負けず嫌いの気持ちから、なにくそと問題に取り組んだ。

2週間後、前記の山本区長が、「對馬君おめでとう合格だ」と言ってきた。父は「区長さん何のことですか?」「熊さん何を言ってるんだ、良一君がドイツ派遣の第一候補者になり99パーセント確実です」・・・・父はびっくりしばらく言葉もでなかった。一言、「良一、お前・・・・」あとは言葉にならなかった。その夜、我が家に親戚兄弟全員が集まった。父は、「良一が内緒でドイツ派遣の試験を受け合格してしまった。母さんが盲人で大黒柱の良一が居なくなったら大変だ。私は反対だ」と・・・・それから賛成反対の意見が出た。確かに母の失明後、弟達と朝夕の食事から洗濯買い物など、勝年、正勝の弟達とやっていた。女二人男六人の八人兄妹で、朝4時半起床、石炭ストーブでご飯を炊きみんなの食事の用意を済ませてから職場へ。兄は教員で結婚して別居、姉も結婚して別居で大変な家族状態である。

兄嫁の父、志賀仁一郎氏（大夕張鉦機械課課長）が「苦しいことは分かるが一生に一度のチャンスだ。行くべきだ」「母さんが可哀想だ」さまざまな意見が出た。そのとき何時も無口な三男勝年が、突然立ち上がり「良一兄貴はドイツに行くべきだ。母さんの世話は俺がすべてやる。安心しろ」とみんなの前で大きな声で言った。この一言で決まった。私は嬉しかった。今でも勝年のあの言葉に感謝している。父にも家族にも内緒で受験したことを詫びた。もしドイツに行った場合、必ず毎月幾らかの金を送金する」ことを約束し家族の了解を得、ドイツ行きの気持ちが固まった。

しかしそれからが大変。職場では行く前に怪我されては困る、と言っていつも軽作業、当初は10月5日出発との事だった。山本区長によれば、他に秋田能代工業高校卒業の川村力男君が選ばれたとの事でした。後で分かったのだが、会社では二陣1班對馬、二陣3班川村としていたらしい。

第二次ドイツ派遣についてトラブルが発生した。第一陣がドイツに派遣されているが待遇や処遇の面でドイツ側と日本側との見解の相違で炭労が第二次派遣に反対となった。あくまで派遣目的が技術習得と言っているが出稼ぎと同じ状態だと第一陣の人から報告がありドイツ側と話し合いがもたれたらしい。

西独派遣労務者選考基準なるものがあり、各社はこれに則り選抜した。選抜の場合、① 所属労働組合の合意が必要 ② 坑内経験三年以上 ③ 21歳から30歳まで ④ ローマ字の読み書きが出来ドイツ語学習に耐え得る者 ⑤ 前科にない者 ⑥ 身長1.64以上、体重56.3kg以上 ⑦ 視力1.0以上 ⑧ 聴力正常色盲なく身体強健にて公的健康検査に合格した者 ⑨ 勤務成績優秀な者 ⑩ 独身であること。備考欄に頭部に3センチ以上の禿げが無いこと、これらの事が選抜の基準にもなっていた。

1957年11月5日に第二次西ドイツ派遣労務者に関するすべてのことが完結し第二次派遣の骨子が決まり180名を一班1月28日、二班2月25日、三班は3月25日の三班に分けて派遣し、これで派遣事業は終了するとした。三菱鉱業では各鉱山から選抜した派遣者を決定し各山元に通知を出したのが年明けの1月8日と聞いた。

私の所に正式に連絡が来たのが前述の1月9日だった。私以上に興奮したのが父で親戚、兄弟、知人に知らせに飛び回っていた。1月16日午前中に札幌事務所に出頭、17日東京に向かい18日に東京本社挨拶などのスケジュールが知らされた。支度金5万円、出張費12,000円、前月の給料合わせて10万円位のお金が入った。約半分は弟勝年に渡し生活費に役立ててもらった。

1月14日の日記に・・・今日が我が家での最後の夜である。なかなか寝つかれない。やはり興奮しているのか、弟たちのいびきが聞こえる。母もしきりに寝返りをする。きっと母も寝付かれないのだろう・・・母には本当にすまないと思っているが許してください。良一、一生に一度の我が儘を・・・きっと元気で帰ってきます・・・と記している。「故郷の地離れゆく身をつばくろに三年（みとせ）経つ日を待ちいずるかな」の詩を残して22年住み慣れた夕張岳の麓、石炭の町を後にする事になった。

大夕張駅には300人以上の人々が見送りに来ていた。母はハンカチを握り締めたままだった。「母さん行ってきます。必ず三年後元気で帰ってきます」。成人してからはじめて母の細い体を抱きしめた。見えない目で僕を見つめぼろぼろと涙を流し痛くなるほど抱きついてきた。「まるで戦時中の兵隊に行く出征軍人のようだ」と亥治郎叔父が笑った。「對馬君万歳・・・万歳」の声の中、ドイツに出発したのが昭和33年1月15日午後1時13分発清水沢行きの三菱大夕張炭鉱鉄道の社線だった。



【大夕張駅名標】

(続く)

4. ブルーノ・タウトの日本における幻の建築 (近藤 基晴 記)

ブルーノ・タウトがナチスによる迫害の危険から逃れるため、日本インターナショナル建築会の招待状があるのを幸いに 1933 (昭和 8) 年にエリカ・ヴィティヒと共に日本に亡命し、結局 3 年半日本に滞在した。この間、1934 (昭和 9) 年 8 月 1 日から 2 年 3 ヶ月を高崎市にある少林山達磨寺内の洗心亭で過ごした。この経緯は既に周知のとおりだ。

ここから先は、今までほとんど触れられることがなかった事実について話をすすめていきたいと思う。

洗心亭に身を寄せていたブルーノ・タウトは 1935 (昭和 10) 年 4 月 20 日当時の君島群馬県知事および井上房一郎氏 (タウトを洗心亭に招聘した高崎市出身の実業家) とともに富岡製糸場を訪れた。その日の日記では『この木構造煉瓦建の洋風建築は、清楚明快でしかも優雅な趣を失わず、實に申分のない、氣持の良い作品である。間取もすぐれているし、工場内も極めて清潔な感じである (食堂は同時に千名の女工員を収容できる。中庭の釣合も立派だ)。曾てはこうして新興日本の曙が始まったのだ。日本の建築が爾來この線を忠實に守ってくれたらよかったのに!』と絶賛している。富岡製糸場が世界で果たした技術革新と国際交流という役割に加え、建築自体もいかに優れているかがわかる逸話だ。

富岡製糸場は 1872 (明治 5) 年に官営模範工場として設立されたが、1893 (明治 26) 年に三井に払い下げられ、9 年後に原合名会社^{*註}に、さらに 1939 (昭和 14) 年に現在の片倉工業株式会社 (当時の片倉製糸紡績株式会社) に経営が移り、昭和 62 年まで操業が続けられた。ブルーノ・タウトが訪問した時は原合名会社の時代であったが、同社での記録は現時点では確認できていない。今後の調査が待たれる。

註：この時の原合名会社の社長は原三溪 (富太郎。三溪は号) である。彼自身は原家の婿養子であるが、原家はもともと現在の埼玉県児玉郡神川町の出で、横浜に本拠を置き生糸貿易で富を築いた。その富で三溪園を造った。



【富岡製糸場全景】



【ブルーノ・タウト設計の世界遺産馬蹄形住宅 (ベルリン)】

さて、先ほど触れた君島知事は教育施設の建設を計画していた。その発端は昭和9年11月、天皇陛下をお迎えして陸軍特別大演習が行われ、演習後県内各地を行幸されたことにあった。その際、進路の誤導入事件があり、当時の県知事 金澤正雄は謹慎処分となり辞任となった。その後任として宮崎県知事であった君島清吉が群馬県知事に就任となった。彼は祖先崇敬の念が厚く、教育施設としての東國敬神道場の構想が始まったわけである。冒頭で触れた1935（昭和10）年4月20日の富岡製糸場の訪問の前に東國敬神道場建設予定地に立ち寄っている。その後タウトは6月24日に県庁を訪問し知事から建設見取り図作成を依頼され、その足で建設予定地を訪問している。ただし、この時点でタウトは国粹主義がはびこる世相の中で外国人であるタウトの計画が実現する見通しはまずあるまい、と考えていた。知事の熱心な勧めもあり知事の信頼に酬いたいという思いがあって引き受けることにした。その後も6月30日に3回目の建設予定地訪問を行っている。しかし、タウトの懸念のとおり結果的にはタウトではなく、大江國風建築塾によって建てられることになった。その建物は東國敬神道場であり現在の富岡市社会教育会館（下の写真）である。



因みに、東國敬神道場の建設は、昭和9年に天皇陛下が現在の富岡市にある貫前神社を参拝され、それを契機に昭和11年3月に全額県民の寄付で建てられた。

タウトが日本を離れるにあたって開いた送別会の席で、君島知事は日本の世相がタウトの設計を許さなかったことに無念の心境を明かした。

君島知事の構想が実現していれば、群馬県にタウトの足跡が歴史的建物として残っていたかもしれない「日本でのタウトの幻の建築」と言えよう。

* 参考文献 「日本 タウトの日記」「旧東國敬神道場沿革史」

5. 独俳（ドイツ語で俳句） — 連載4 （深田 勝弥 記）

○ 季語のこと

俳句は五・七・五のリズムが大切ですし、西欧の詩は音の強弱とか長短のリズム、それに漢詩と同様に脚韻も大切です。あと一つ俳句に大切なものに季語があります。ようやく五・七・五で一句ができたと思ったのに、季語のないのに気が付き、何と邪魔なものがあるのかと思うこともしばしばです。

以前、お茶の伊藤園は無季語でもよいからと、俳句を募集したところ、小学生からも多くの応募があり、おかげで、売上も上がったとの事です。

僕も日本語でさえ難しい季語をドイツ語で表すのに大分苦勞しました。例えばタンポポは *Löwenzahn*（ライオンの歯）と、辞書には書いてあり、確かに納得できるけれどもどうもイメージが合いません。そのように外国の人たちにとっても季語は厄介なものでしょう。例えばスウェーデンは一年の半分は冬だそうです。南方では年中夏でしょう。そういうところで季節感を歌うのは無理でしょう。

しかし、季節の移り変わりに恵まれている日本でも、季節の言葉を沢山紡ぐのに苦勞してきました。雨、風、に関する言葉はもちろん。村の祭り、家の行事、仕事、さらには有名な俳人の命日も季語にしてきました。

もちろんその国や地方によって、詩情は日本の俳句と違うのは当然ですが、お互いそれを理解し合って、世界のあちこちに沢山の詩語が出来て、俳句が拵がればそれは嬉しいことです。

○ 語順のこと

日本語は「テニヲハ」によって主語・述語の語順の関係が、分かります。ドイツ語も冠詞と語尾の変化によって分かります。例えば主語は必ずしも文頭に来なくてもよいし、目的語が文頭にあってもよいのです。この点でドイツ語は日本語に似ていて、俳句の作り易い言語だと思います。

この詳しい説明は僕の手には負えませんので、勘弁させてもらい、芭蕉の俳句をその国の人により独訳、英訳されたものを紹介しますので、ご鑑賞してみてください。

○参考俳句

夏草や ^{つわもの}兵どもが夢のあと

独語

Das Sommergras, ach,
Ist von den Kriegern nun noch
Der Rest der Träume.

ああ夏草よ、今でも戦士たちの、夢の名残りである。

英語

A mound of summer grass:
Are warrior's heroic deeds
Only dream that pass?

夏草のマウンド、勇士たちの英雄的な行いか、ただ過ぎ去った夢なのか？

閑さや岩にしみ入る蟬の声

独語

Nichts als die Stille!
Tief in den Felsen sich gräbt
Schrei der Zikaden.

ただ静かさのみ、深く岩に入り込む、蟬の叫び声。

英語

In this hush profound,
Into the very rocks it seeps ----
The cicada sound.

深い静かさの中、まさに岩にしみ入る、蟬の鳴き声

さみだれをあつめて早し最上川

独語

Den Sommerregen
Hat rasch zusammengebracht
Der Fluss Mogami.

夏の雨を、性急に集めているのは、それは最上川だ

英語

Gathering as it goes
All the rains of June , how swifty
The Mogami flows!

集めながら行くように、六月の雨の全てを、何と速く最上は流れるのか！

○蛇足

これは十年前に初孫が生まれた時の俳句です。

冬ぬくし昨日生まれし子のあくび

Den warmen Winter
Das gestern Geborenes
Gähnt zum ersten Mal.

geboren という過去分詞が名詞化して **Geborenes**「生まれた子」として使えます。
この便利さもドイツ語のありがたい所でしょう。

稚内にて

たんぽぽやここが線路の北の果て

Der Löwenzahn blüht,
Es ist hier das Terminal
Im hohen Norden.

以上4回にわたって、拙い文をお読み頂きありがとうございました。

6. デザイナー修行奮闘記 - 連載 9 (井上 晃良 記) 私の「鉄道デザイナー」への道 III

語学学校のカリキュラムと東独旅行

検問所での緊張から解放されホームに登ると、目の前に広がる光景に驚いた。それはまるで戦前のドイツに来たかのような雰囲気だったからである。S バーンの車両も戦前からの木造であるばかりか、乗車券の切符を刻印するスタンプも切符を入れるだけで自動的に刻印されるものではなく、機械の上にある大きなボタンを手で叩いて自分で刻印するものである。もちろん周りの景色も煤汚れた石造りの壁面が並び、明らかに西ベルリンとは異なる世界である。まさに駅1つでタイムスリップしたかのような感覚に襲われたのである。当時家庭で使われる暖房は西側では石油かガスであるが、東側は石炭が多かったようで、街中を覆う煤の匂いと煤汚れが目と鼻を刺激するのである。この感覚はベルリンだけではなく当時の東独の何処の街も同じであったに違いない。

一方で、高架を走る S バーンに乗りながら、東ベルリンの街並みを眺めると戦前と変わらぬ様子が目の前に広がり興味深かったのは確かである。特に線路脇に立つ東独国鉄の食堂や寝台サービスを行う立派なミトローパ社の本社建物を発見した時は、ちょっとした感動もあった。おそらくミトローパ社は設立以来、東西鉄道分裂後もここで本社の機能を果たしていたのであろう。東西分裂後は、西ドイツの国鉄 (DB) の食堂や寝台サービスは、ミトローパ社が東ベルリンに本社があるため、DSG (ドイツ寝台食堂会社) という会社を新たに設立し運営されていたのである。東西ドイツ国鉄統一後は、鉄道会社と共に、戦前同様ミトローパ社と DSG 社も合併し、会社名もミトローパ社に戻ったが、現在の食堂車のサービスはドイツ鉄道直営となっている。



【東ベルリンの S バーン】

S バーンで数駅のところにアレキサンダープラッツ駅があり、我々はそこで下車、駅の目の前にそびえる東ドイツのランドマークとも言えるテレビ塔の建物に向かう。観光シーズンでなかったためか、とても東ドイツの首都とは思えない閑散とした雰囲気であったが、目指すはここにある国営旅行会社である。

ここで私達がこのまま1泊2日でドレスデンへ旅行に行きたい旨を告げると、新たなビザを発行してくれる。同時にドレスデンの宿泊先もここで手配できる、というより手配させられるのである。当時は国民の旅行の自由もないので、外国からの旅行者である我々にはホテルの予約など都合は良かったが、それは決してリーズナブルという訳ではなかった。ビザの発行手数料も必要であるし、ここ迄来るのにもちょっとした冒険に近いものでもあったが、ここからドレスデンまでも冒険である。

全ての手続きを済ませると、ここから再びSバーンに乗ってドレスデン行き列車の出るベルリン東駅に行く。2007年に大規模に改修されたモダンな建物に変わり、今ではICEが多数発着するが、我々が訪れた1988年の同駅は、やはり共産主義国らしい妙に広々とした、また殺伐とした雰囲気漂う空間であった。

東側と西側の物価の大きな違いが理解できるのは鉄道運賃かも知れない。そこで我々2人は、このチャンスに1等車に乗車することにして切符を購入した。社会主義なのに1等と2等があるのはおかしいと思いつつも、現実とはそういうものなのだろうと自ら納得したのである。

乗車予定の列車の発車時刻迄余裕があったので、駅近くでコーヒーでも一杯と思っただが、探しても飲食店が見つからない。ようやく一軒のお店を見つけ、ドアを開け薄暗い店内に目をやると、中の客や従業員が一斉に我々の顔を見る。と同時に「ここはあなた方の来るところではない」というような言葉を二言三言もらい、結局は入れなかったのである。確かにほとんど人影すらない場所に2人の場違いな日本人が居ることすら違和感なのであろう。とにかくここは東側であるという現実を垣間見た一瞬でもあった。

仕方なく、駅に戻り発車番線を確認後ホームに出る。我々の乗るD-Zug（急行）は既にホームに居て早速乗車したのである。東独国鉄（DR）のD-Zug用客車は、緑とクリームのツートンカラーで6人用コンパートメントである。

車内は、木目のデコラ化粧板が貼ってあり、一見落ち着きのある空間でもあるのだが、その木目化粧板の品質の悪さが目立っていた。この客車は決して古い車両ではなかったため、東西ドイツ統一後も暫く運用についていたが、東独製の車両は、車内で使われている接着剤が臭いが酷く有害であるとか、断熱材として使われているアスベストが問題であるとか、後々迄悪口を叩かれた車両である。

我々の個室には、他に1人の紳士が同室となった。出発のアナウンスもなく、静かに出発した列車は、一路ライプツィヒを目指す。ライプツィヒは、ドイツでは有名な大都市で当時も今も各種見本市が開かれ、有名な交響楽団の本拠地もある。ベルリン東駅の飲食店で悪い体験が残っていた私は、西側では味わえない雰囲気になじめず、またもしかして監視が見張っているかも知れないと感じてしまい、変な緊張感を強いられていた気がしていた。よってカメラを下げていても、国境検問所からは入国してからシャッターを切れずにいたし、今思えばとても勿体なかったのだが、東ドイツにいるだけ怖さを感じていたのは確かである。

ところが列車はライプツィヒに到着し、あの巨大なドーム型天井の駅舎に列車が入ると、列車の写真を撮りたいという思いが湧いて来たのである。しかし、やはりここは途中駅で列車外には出ず、窓からその威容を眺めることにした。行き止まり駅であるライプツィヒ中央駅から、列車は反対方向に向きを変え、ドレスデンへと向かう。戦前は、これと同じ路線を世界的に有名な HWZ（ヘンシェル・ヴェックマン・ツーク）と呼ばれる蒸気機関車牽引の高速列車が往復していた。この列車は、数々の革新的な試みをしたことで有名で、当時のハイテク満載の列車である。その1つである密着式連結器は、現在でも世界で使われている。その速さは、営業最高速度 160Km/h、平均速度 106Km/h というもの。我々が旅行した当時でも既に電化されてはいたものの、到達時間は当時平均 100 分というから、それよりも遅いくらいであったかも知れない。

（本記事はイカロス出版株式会社発行『鉄道デザインEX 03』に連載されたものを転載したものです。同社のご好意により転載の許可をいただいています。）

（続く）

7. 事務局よりのお知らせ

2016年11月26～27にホテルグリーンプラザ軽井沢にて懇親会を行いました。毎年同ホテルで行われるドイツフェスタに合わせて今回もこの時期に開催しました。どういうわけか、毎回この時期には雪が降り、今回も11月としては稀にみる大雪がありましたが、20名の参加を頂きました。表紙の写真は二日目の朝に撮ったもので、参加者の一部のみとなってしまいました。5年前に植樹した菩提樹も順調に育っています。



【懇親会での乾杯】



【二日目朝の集合写真：鈴木会長ご夫妻は所用で早めに退出し、残念ながら写っていません】

2017年は「ドイツフェスティバル in ぐんま」の開催年にあたります。昨年春からパネル展の勉強会を月1回のペースで行っています。今回は群馬県に關係の深いベルツ博士を取り上げ、群馬の温泉と絡めた内容にすべくパネルの作成に取り組んでいます。今年の一つ大きな問題を抱えています。それは会場として使用する県庁舎の耐震工事が4月から9ヶ月に亘って行われるため、騒音とスペースの問題が大きく立ちはだかっていることです。従来3本柱である「ドイツ製品の紹介・販売」「音楽イベント」「パネル展」のうち音楽關係の同時開催は断念せざるを得なくなりました。

一方、来年2018年はぐんま日独協會創立30周年記念の年になります。そこで記念式典の一環として「音楽イベント」をこの時に行うことを考えています。式典の内容は4月の総会などで会員のみなさまの知恵をいろいろと出していただいで計画したいと思います。

その総会は4月29日（土・祝）に行います。総会後には公開講演会を企画しています。講演者には公益財団法人日独協會職員の鎌田タベアさんを予定しています。昨年刊行された「ドイツ人の当たり前」の本をベースにした内容です。ご期待ください。



以上